

『袖中抄』「ミタラシガハ」注の意図

殿 本 佳 美

はじめに

藤原顕輔の養子となり、義兄清輔の死によって和歌の家である六条藤家を継ぐこととなった顕昭は、守覚法親王の命に従い『古今和歌集注』『拾遺和歌集注』など多くの注釈書を注進した。そのひとつ『袖中抄』⁽¹⁾は「(9)アケノソホブネ」や「(4)カラヒトノフネヲウカベテアソブ」など、二百九十八の難義語を数多の文献と自説によって注した歌論書であり、その構成は岡田希雄氏が歴博編『歌論書一―三』の解説で論じられたものを紙宏行⁽²⁾氏が明確にまとめられているので、それを次に示す。なお、行頭の字下げは本稿で引用する『袖中抄』の底本『袖中抄』の校本と研究⁽³⁾で用いられた高松宮本および冷泉家時雨亭文庫本に見られるものである。

① 項目名（被注歌語）

② 出典歌

③ 顕昭云（自説）

④ 無名抄云、奥義抄云など（他歌学書・資料からの引用）

⑤ 今云、私云など（顕昭の他歌学書・資料の説に対する

コメント）

このように他文献と自説を駆使して詳細に論じられる難義語がある一方、「(265)サカキサスマ」「(277)クモトリノアヤ」など、出典歌と短い自説のみの項目も数多くある。本稿で取り上げる「(137)ミタラシガハ」の出典歌である「恋せじとみたらし河にせしみそぎ神はうけずぞなりにけるかな」歌は『伊勢物語』⁽³⁾六十五段と古今集⁽⁴⁾（末尾は「けらしも」、顕昭の『古今集注』⁽⁵⁾では「けらしな」）にも入集する有名な歌であるが、『袖中抄』

では後者にあたり、「(48)ワカクサノツマ」(伊勢物語十二段・古今卷第一(一七))⁽⁵²⁾「ミヤビ」(伊勢物語初段)などで『伊勢物語』の章段そのものを引用する注釈態度からみれば少し違和感を覚える。本稿では顕昭が「⁽¹³⁷⁾ミタラシガハ」を注する際に有名な「恋せじと」歌を詳細に論じることなく、歌枕「ミタラシガハ」の少しの解説と引用歌二首のみをあげるにとどめた意図をその引用歌から探っていく。

一、顕昭『古今集注』の「恋せじと」歌

顕昭の『古今集注』は、文治元(一一八五)年〜三(一一八七)年頃に成立したとされる『袖中抄』以前に八回に分けて注進された。「恋せじと」歌が入る巻十一と巻十二は文治元(一一八五)年十月に注進され、そこで同歌は次のように注されている。

コヒセジトミタラシガハニセシミソギカミハウケズモナリ
ニケラシナ(五〇一)

ミソギハ祓ナリ。大嘗會ノ御禊ヲバトヨノミソギトヨメリ。萬葉ニハ潔身トカケリ。ミタラシガハ、神山ヨリナガレイデ、賀茂御社ノ貴船ノ片岡ノ中ヨリトホレル河ナリ。ミタラシトハ御手洗トカケルコトモアリ。又他神

社ノ前ニナガル、水ヲモミタラシト申ハベメリ。此歌ハ伊勢物語ニアリ。業平ト二條后トノ間ノ事ニテ、ヲトコノヨメルトミエタレド、古今ニ讀人不知トアリ。凡伊勢物語歌中ニ、作者アラハレヌベキ歌モ、古今ニハオホク作者モミエヌハ、ヨリフシニシタガヒテ古歌ヲモカキツケル事トモアレバナルベシ。

ここでは『伊勢物語』本文は引用されないものの、「恋せじと」歌は業平と二條后との間で交わされた業平の歌であるとし、『伊勢物語』中で作者名が明らかなき歌でも『古今集』で作者名がないのは、『伊勢物語』ではその時々によって古歌までも業平の歌として次々と出てくるからであろうと述べている。

二、「袖中抄」の本文

一方「袖中抄」では出典歌として「恋せじと」歌をあげるものの、『伊勢物語』六十五段については述べられない。

⁽¹³⁷⁾ミタラシガハ

コヒセジトミタラシガハニセシミソギカミハウケズナリ
ニケラシモ

顕昭云 ミタラシガハトハ神ノオマヘノ河ヲ云ナリ

御手洗河トカケリ 京極御息所春日社歌合云

カス・ノ、マツシカレズハミタラシノカハノナガレテ

タエジトゾオモフ

堀河院百首 匡房卿哥云

カミヤマノフモトラトムルミタラシノイハウツナミヤ

ヨロツヨノカズ

是ハ賀茂ノミタラシガハナリ 前哥ハ春日ノミタラシ河

ナリ イヅレノ社ニモ河アラバヨムベシ

また、『奥義抄』(十九 秀歌体)では「新撰髓脳云」として「凡

歌は心ふかく姿清げにて、をかしき所あるをすぐれたりと云ふべし。」という公任の歌論をあげ、公任があげる貫之や躬恒の歌を引用したのちに「恋せじと」歌についての公任の「是は深養父が元輔にをしへける也。(『新撰髓脳』では「をしへける歌也」)をあげるのに続いて「かやうによむべきにこそは。これも同髓脳にみえたり。」と述べられる。しかし顕昭は清輔が「恋せじと」歌を秀歌とし、『新撰髓脳』にも取り上げられた歌であるという記述を『袖中抄』に採用せず、右の二首を引用するのみであった。紙氏によれば『俊頼髓脳』『綺語抄』『和歌童蒙抄』『奥義抄』の四書については、注釈を加える項目に、右の四書に注釈があれば、原則としてほぼ網羅的にとりあげ、か

つ該当項目のほぼ全文を引用する」のにも関わらずである。

三、『袖中抄』の引用歌

『袖中抄』(137)「ミタラシガハ」で引用される一首目「カスガノ、」

歌は、延喜二十一年(九二二)年に行われた『京極御息所春日社歌合』にみえる。以下、引用する和歌本文・歌番号・詞書などは特に明記しないかぎり『新編国歌大観』(昭和五十八年)平成四年 KADOKAWA)によった。

『京極御息所春日社歌合』

左勝

26かすがのにはるはかよはむわがためにまつころありてよは

ひますなり

右

27かすがののまつしかれずはみたらしのみづもながれてたえじ

とぞおもふ

本

躬恒

28さくらばなゆきとふるめりみかさやまいざたちよらむなにか

くるやと

この『京極御息所春日社歌合』は京極御息所が宇多法皇とと

もに春日神社に参詣の折、藤原忠房が二〇首の歌を献じたが、その後この二〇首に対する返歌を女房たちに詠ませて二〇番の歌合とし、さらに二番を加えて披露したもの。「本」とあるのは本歌にあたる忠房の歌（躬恒の代作歌を含む）である。（こは『新編国歌大観』の解題を稿者が適宜要約した。）

この歌合で「カスガノ、」歌は負けとなったが、後に清輔の歌論書である『袋草紙』⁸や藤原長清の私撰集『夫木和歌抄』に採られている。『袋草紙』下に「証歌」の「異なる事を詠める歌」の一つとしてあげられているのを顕昭も採用し、出典歌である「恋せじと」歌とは詠作年代が前後するものの、「ミタラシガハ」の証歌の役割を「カスガノ、」歌に持たせたのである。証歌とは『新日本古典文学大系 袋草紙』の注にあるように、「先例として拠り所にし得る古歌。歌合では表現の前例としての証歌の有無を判定基準とした。」歌のことであるから、「カスガノ、」歌をここで引用したことは顕昭にとって重要な意味を持つといえるのではないだろうか。

引用される二首目の「カミヤマノ」歌は長治二（一一〇五）年頃に成立した『堀河百首』にみえる。

『堀河百首』雑甘首

（祝詞）

匡房

1587 神山のふもとをとむるみたらしの岩うつ浪や万代のかず
この歌は「カスガノ、」歌と同じく『夫木和歌抄』に、また至徳元（一一三四）年に成立した二〇番目の勅撰集である『新後拾遺和歌集』に採られている。

他文献への採録状況を見ると、この二首はともに、顕昭と同時代以降一定の評価を受けていたものと思われる。「カスガノ、」歌では常緑樹の松にあやかつて、神の御前を流れるみたらし川の絶えることのない流れを詠み、「カミヤマノ」歌ではみたらし川の岩に寄せる波の数を万代と詠むことによつて、どちらの歌も神に永遠の榮えを祈り、奉つたものであろう。

四、出典歌「恋せじと」歌

「恋せじと」歌は『伊勢物語』六十五段で業平と思われる男の歌として詠まれ、『古今集』（卷十一恋歌一）にも入集する有名な歌である。在原氏の若い男は大御息所のいとこの女と恋仲になるが、その見苦しい振る舞いによつていつか身を滅ぼすだろうと思つた男は「私のこのような心をやめさせてください」と神仏に祈るのである。次に『伊勢物語』六十五段の本文を抄出する。

仏神にも申しけれど、いやまさりにのみおぼえつつ、なほわりなく恋しうのみおほえければ、陰陽師、神巫よびて、恋せじといふ祓への具してなむいきける。祓へけるままに、いとど悲しきこと数まさりて、ありしよりけに恋しくのみおほえければ、

恋せじとみたらし河にせしみそぎ神はうけずもなりにけるかな

といひてなむいける。

その後帝は男を流罪にし、それを知った大御息所が女を蔵に閉じ込めて折檻した。女が蔵で泣いていると男が流刑地から夜ごとやって来て笛を吹き歌ったというのである。藤本勝義氏は「この歌は、「恋」とそれを禁忌する神域を表象する「御手洗川」との意表を突いた取り合わせにユニークさがある。」「恋はもうすまいという誓いを神様が受け入れぬとする発想が奇抜であり、恋に埋没している自己を妙な言いまわしで表現したところにも、この歌のおもしろさがある。」「恋愛を背景とする状況下での「御手洗川」は、「恋せじと」歌をいやでも想起させることとなる。」と述べておられる。

では「恋せじと」歌はどのような歌集に収載され、どのように詠まれていったのだろうか。早い例はやはり公任の私撰集『金

玉集』（寛弘四（一〇〇七）頃成立）、藤原範兼編の名所歌集である『五代集歌枕』（成立年代未詳）、上覚の歌論書『和歌色葉』（建久九（一一九八）年頃成立）などがあり、『千五百番歌合』千二百四十番の判詞には次のようにある。

千二百四十番 左

隆信朝臣

2478 恋せじのみそぎもいさやゆめにだにみたらし河のわすれがた

みは

右

内大臣

2479 あけくれはなれしむかしのわすれつつゆめかとのみぞおもひなざる

左歌は、こひせじとみたらし川にせしみそぎ神はうけずもなりにけらしも、と申す歌につきて、恋せじのみそぎとよむ事侍れど、こひせじのとよむ事はうけられぬ詞に侍り、ただ心うつくしう恋せじとよみ侍らばやとふるき人も申し侍りき

「恋せじのみそぎ」と詠んだ左歌について「こひせじのとよむ事はうけられぬに侍り、ただ心うつくしう恋せじとよみ侍らばやとふるき人も申し侍りき」とかなり厳しく判じられるのである。「恋せじと」歌はこの他にも定家が八代集から秀歌を選んだ『定家八代抄』や同じく定家の『近代秀歌』など多くの歌

集・歌論書に収載される有名な秀歌であった。

慈円の詠歌を南北朝時代に編纂した『拾玉集』¹⁰⁾詠百首和歌^当
座百首部では恋をしようと禊をする場面が詠まれている。

(寄河恋)

1468 恋せんと御手洗川にする禊神はうけずもならばなら南^{なな}

「恋をしようと御手洗川に禊をした私の祈願を、神は納受しなくても恋は成就してほしい」というぐらいの意味であろうか。このように、やはり「恋せじと」歌には「ユニークさ」が内包されているのである。

五、「ミタラシガハ」の詠作歌

当然のことながら「ミタラシガハ」は「ユニークさ」を持って詠まれるだけではない。『国基集』（成立年代未詳、国基は康和四（一一〇二）年に八〇歳で没した。）には「ミタラシガハ」の清らかさや美しさが詠まれた一群がある。

賀茂の禰宜成助にはじめてあひて

87 さきわたるみたらしがはのみづきよみそこのこころはけふぞ
しるべき

かへし、禰宜成助

88 すみよしのまつかひありてけふよりはなにはのこともしらす
ばかりぞ

その日、まうできあひて、祇園別当良暹

89 すみよしにみたらしがはもながれあひてこのわたりこそすま
まほしけれ

かものみたらしがはのほとりにすずみ侍りしに

90 かみやまのしたもささらにながれいづるみたらしがはのみづ
のすずしき

かへし、成助

91 わがさとにかたりもわたれけふむすぶみたらしがはの水のす
ずしき

また、『袖中抄』引用歌二首と同様に神の御前で詠まれた『別
雷社歌合』述懐の「ミタラシガハ」歌にも「恋せじと」歌のよ
うな「ユニークさ」はみられない。

二番 左勝

実房

123 人はまたおなじいのりをいのもとただしき道を神はことわ
れ

右

讃岐

124 いはでのみたのみぞわたるよそながらみたらし川の音にたて
ねど

左、存故実之風、叶雅頌之時、彼の毛詩、然者頌者美盛徳之形容、以其成功告於神明者也といへる、この心なるべし、右、みたらし川の音にたてねどといへる、歌ざまはをかしく侍るを、よそながらたのみわたらんもほいなくやあらん、以左為勝

『毛詩』の集伝で「そんなわけで頌は美しい徳の盛りを形容して、それによつてその成果を神に告げるものです」と頌について述べているように、それと同じような神への祈りを左歌は詠んでいる、と判じている。「ミタラシガハ」が詠まれた右歌は負けとなつたものの、「歌のありさまは趣がある」と判じられている。

『袖中抄』「〔137〕ミタラシガハ」で春日社参詣の後に詠まれた歌と祝詞として神に奉つた二首を引用した顕昭は、藤本氏のいう「恋愛を背景とする状況下」にはない「ミタラシガハ」は神の御前でその流れの清らかさを詠まれるべきものであるといひたかつたのではないだろうか。

六、引用歌二首の意図

このように「ミタラシガハ」は『古今集注』には「ミタラシ

ガハ、神山ヨリナガレイデ、賀茂御社ノ貴船ノ片岡ノ中ヨリトホレル河ナリ。」とあり、また『袖中抄』には「是ハ賀茂ノミタラシガハナリ 前哥ハ春日ノミタラシ河ナリ イヅレノ社ニモ河アラバヨムベシ」と注されるものの特に難義語とは思われず、歌枕の解説としてだけならば『袖中抄』に取り上げる必要性を感じない。顕昭が『袖中抄』の「〔137〕ミタラシガハ」の項目の出典歌として「恋せじと」歌をあげたのは、それが「ミタラシガハ」の最も古い時代の用例であり、『古今集』にも入集し、後世に大きな影響を与えた有名な歌であるからだろう。しかしその意図は、当時から広く認識されていた「恋せじと」歌から想起される「ユニークさ」にはなかつた。「恋せじと」歌を秀歌とする『奥義抄』を引用せず、したがって否定も肯定もすることなく、『袋草紙』に「証歌」としてあがつた『京極御息所春日社歌合』「カスガノ、」歌と「祝詞」と題して詠まれた『堀河百首』「カミヤマノ」歌を引用した。顕昭は「ミタラシガハ」に「ユニークさ」ではなく「カスガノ、」「カミヤマノ」両歌に共通する、神に永遠の栄えを祈り、また神の御前でその流れの清らかさをもつて詠まれるべきものであると意図したのではないだろうか。

また、「或書」「或抄」などと書の名を伏せて引用される「袖

中抄』の短い項目は、紙氏¹²⁾によれば、「取り上げるに値しないという顕昭の評価もあるう。」というが、「⁽¹³⁷⁾ミタラシガハ」はそれには当たらないだろう。「⁽⁷¹⁾シナガドリキナノ」で

又綺語抄云、頼綱朝臣ハキノシ、ヲシナガドリト云
トゾ

私云 アシヒキノヤマトツヅクルヤウニ シナガドリ
半トツヅクトハイフニヤ 大ニ心エズ

とあるように先人の論を堂々と批判する顕昭が、「⁽¹³⁷⁾ミタラシガハ」では『奥義抄』を引用せず、『袋草紙』にあがった証歌を引用するのみにとどめたこともまた注目に値する。

付記 山本登朗教授には大学・大学院で長きにわたるご指導を賜り、現在も編集者としてお仕事を一緒にさせていただけることに感謝しております。また山本教授が長年手掛けてこられた弊社『日本説話索引』の研究成果として作成されたCD-ROM [LEGEND] は本稿の用例検索に大いに活用させていただきました。重ねて御礼申し上げます。

注

- (1) 『袖中抄』の本文と項目番号は橋本不美男 後藤祥子『袖中抄の校本と研究』(昭和六十年 笠間書院) による。
- (2) 紙宏行『袖中抄の研究』(新典社研究叢書296 平成二十九年 新典社)
- (3) 『伊勢物語』の本文は『竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』(新編日本古典文学全集12 平成六年 小学館) による。
- (4) 『古今集』の本文は『古今和歌集』新編日本古典文学全集11 平成六年 小学館) による。
- (5) 『古今集注』の本文は『日本歌学大系 別巻四』(昭和五十五年 風間書房) による。
- (6) 『奥義抄』新撰髓脳』の本文は『日本歌学大系 第一巻』(昭和五十三年 風間書房) による。
- (7) 注(2) による。
- (8) 『袋草紙』の本文は『新日本古典文学大系29 袋草紙』(平成七年 岩波書店) による。
- (9) 藤本勝義「古今集歌「恋せじと御手洗川にせし禊…」をめぐって——「新撰髓脳」「源氏物語」等の享受方法」——(『青山學院女子短期大學紀要』昭和五十八年)

(10) 『拾玉集』の本文は『和歌文学大系58 拾玉集(上)』(平成二十年 明治書院)による。引用歌下句の訳は本書の脚注を拝借した。

(11) 『漢文大系 第十二卷 毛詩 尚書』(明治四十四年 明治書院)を参照した。

(12) 注(2)による。

(とのもと よしみ／清文堂出版株式会社)